雖も之を買付けたのであつたが、戰後に於ては L. C. W. F. A. Q. 以上の特等品のみを採別し、それ以下は中級品ですら買氣が集まらぬ仕末となり、其の上にマライ、東印度の買付値段が低廉となつた爲、タイ國のゴム買付は不振を極めるやうになり、爲に大部分のゴム園は一時休業をなさざるを得ぬことゝなつた。

こゝに於てタイ政府は之が對策として一時業者の損失補償まで考慮せる結果、生産制限を行ふことゝなり、一時の便法として一九四二年度下半期に於けるゴムの生産量を全能力の六〇%迄引下げることにした。

然るにこのことは非常に波及することの廣い問題で、ゴム園經營の資本家はもとより、ひいてはゴム園に働く勞働者の生活までも脅かすことゝなり相當大きな社會問題となつた。

一方、戰前まで國家收入の一三%五を占めるまでに至つてゐた關稅收入の杜絶は、必然的に國家財政に大きな破綻を生ぜしめるので、これが補塡は何によるべきや、これも亦一つの難問題なのである。兎に角に何とかして再編成を確立せしめねばならぬのであるが、このことはタイ經濟の共榮圈的性格への轉換としても大きな性格更生の一として注目に値ひする。

インパール其の他

一 インパール概觀

緬印國境を突破して破竹の進擊を續ける我が精銳部隊が第一歩を印したのはマニプール侯國であるが、マニプール侯國はインドのアツサム州東南部に位置する東西約百五十粁、南北約二百粁の土侯國で四圍は何れも二千乃至三千米のヒマラヤ山脈に蔽はれ、中央部の盆地に侯領マニプール王城の所在地インパールがある。

このインパール盆地は海拔約八百米、南北約六十粁、東西約三十粁の縱に長い平原で、インパールの中央部には王宮、外人住宅、兵營等がある。住民の大半は農業を營み、インパールはマニプール土侯國交通上の要衝で、ディマプール—インパール道及びインパール—シツタン道の三つがマニプールの最大幹線である。ディマプール—インパール道は百三十四哩、鋪裝された自動車路、インパールから進んでゆくと平坦な十五哩を過ぎて山にかゝり、六、七百呎登つて坂を下るとディマプールに達する。急カーヴが多く、雨季には危險が大である。この道路上には人口約四千五百のコヒマがあり、終點ディマプールでアツサム—ベンガル鐵道に連なる。インパール—シルチアール道は百二十五哩、良好な馬道で自動車も通れるが、途中多數の溪谷に架かつてゐる橋は大部分吊橋なために大部隊特に裝甲部隊は通過困難である。インパール—シツタン道も馬道であるが、これは最近幾分廣くなつてゐる模樣である。

インパール附近の産物は米を第一とし、玉蜀黍や稗、甘藷、茶之に次ぎ、附近には木材が多い。この地方で最も多い病氣はマラリアで、死亡者の三分の二を占める。次いで汚い水で水垢離をとる宗教的習慣などからコレラ、ペスト、赤痢、呼吸器病も多い。インパール市には中等學校が二つ、初等教育程度の學校が一つあるが、インパール平地には小學校級六十六あり、またタングール山地には中學校もある。

侯國の全人口は約四十五萬五千、そのうち八萬六千が首都インパールにゐる。人口のうちマニプール族が大半を占め、山岳地帶にはチン、シヤン等の小數民族が住んでゐる。マニプール族の出所については明らかにされてゐないが、西北メリティイ族と數種族の混血といはれ、インド教徒多く、概して體軀長大、皮膚美はしく、容貌整ひ、わけても男女とも清潔を尊び女は生色紅顔であるが、この溫柔なマニプール族も現在まで英國の二回に亘る侵略に對して勇戰し、第一次侵略戰では英軍を擊退、英國をして對マニプール干渉を杜絶せしめたといふ輝かしい歷史を有つてゐる。その後英人の統治に入ると共にその支配に歎らず、一八九〇年から一箇年コレイン王の指揮下に革命の烽火をあげたが、衆寡敵せずコレイン王土侯國は反英に對する最後の悲壯な抵抗のうちに滅亡した。これに反し、現王パアドウは親英的で二千名の土侯軍マニプール大隊も英國の指揮下に晏如として番犬の役目を果すに止まり、良民達の胸奥には、かねて底流する反英感が次第に上つてゐるといはれ、日印軍を迎へ暴虐英軍の强制徵發を辛うじて逃れた彼等が僅かに採取し得た砂糖、野羊の乳を進んで差出しわが兵隊さん達を喜ばせてゐる。

又チン族は北ビルマのチン丘陵地帶からアツサム州東南部の山岳地帶を住居とする密林の住民で、別名をナガ族といふ。これはインド語で裸を意味するが、事實は彼等はニューギニアのマイ族、ポリネシヤ族に似てゐる。闘爭的種族で、射擊にかけては天才的の腕を持つてゐる。これら惠み薄き邊疆民族の上にも今や皇威洽くわが勇士達を多大の珍味大敵で惱ませながら皇軍に可憐な協力振りを見せてゐる。

ニ　アツサム鐵道

ベンガル鐵道はベンガル灣岸のチツタゴンを起點とし、スルマ河溪谷を縫ひ、カチヤール高地を橫斷、北上してアツサム州に入り、ブラマプトラ河右岸を走つて支那西康省との國境テンスキヤに至る全長八百九十九キロを有するものである。重疊たる山岳と幾多の河川を越えるこの鐵道工事は難澁を極め、工事費二億五千萬ルピー、竣工までに實に九箇年の日子を要してゐる。一九三八―三九年の統計によれば、同鐵道に運轉されてゐる機關車は二百三輛、貨車五千八百三十九輛、客車八百七十輛、客車はインドの各鐵道の例に洩れず扉が外開きになつてをり、各車輛間の通行が出來ないやうになつてゐる。これは英人がインド人の車內通行を嫌ふためだといはれ、インド民族を人間扱ひにしない英國の偏狹な政策がこゝにも現はれてゐる。アツサム―ベンガル鐵道の持つ戰略的な價値が現在極めて大きいに拘らず、全線單線である上に一メートル狹軌であるため、輸送能力は甚だ低い。更に地形が非常に

悪いため同鐵道がブラマプトラ向の左岸を走りながら、その右岸を通ずる東ベンガル鐵道との橋梁連絡がなく、數箇所に於て渡船で連絡してゐる狀態であまる。た旅客列車の平均速度は一時間二十五キロ、貨物列車は十九キロ程度で、インドに於てさへ最も遅い鐵道として定評がある　目下軍需資材の輸送にその全能力を集中してゐることは明らかであるが、以上の諸點からその輸送力は大したものでない。一九三八―三九年の調査によれば黄麻、石炭、食糧、石材、燈油、ガソリン等百八十三萬二千トンを輸送したに過ぎなかつたといふ。

同鐵道は多くの丘陵地帶を通じ、各所でブラマプトラ河その他を渡つてゐるため、インドの他の鐵道に比してトンネルと鐵橋が甚だ多い。鐵橋のうち最も有名なのはメグナ河に架けられた全長八百九十九メートルのキングジョージ六世橋である。このやうな大鐵橋やトンネルが多いため、これらが爆撃されるとアツサム―ベンガル鐵道は容易に而も相當長期に亘つて不通となり得るわけである。同鐵道從業員は一萬六千六百十四名あるが、そのうち歐洲人は僅か四十五名、このほかに英印混血兒二百四十名があるが、その他は全部インド人で、宗教別に見るとヒンヅー教徒が約六割を占めてゐる。一昨年八月開催された國民會議派のボンベイ會議以後鐵道從業員の罷業が各地に頻發したが、スバス・チャンドラ・ボース軍のインド進撃と共にこれが再燃し、アツサム―ベンガル鐵道のインド從業員一萬六千名が動搖するならば、同鐵道の動脈硬化狀態が起り得るといふことが出來る。新援蔣路としてのレド公路との連絡は終點テンスキアの南方地點で分岐する私鐵によりビルマ國境の田舍町レドに至つて結ばれる。

三　レド公路

レド公路は重慶、榮山、西昌、中甸からビルマのミートキーナを經てレドに至る豫定公路で、全長二千三百キロ、重慶ではビルマ公路喪失後その建設に着手、昭和十六年秋榮山・西昌間の所謂榮西公路五百二十五キロを完成したと傳へてゐる。目下西昌・レド間の建設工事を急ぎつゝあるが、インパールを目指して進撃する皇軍によるコヒマの占領は直ちにその北方、アツサム・ベンガル鐵道上の要衝ディマプールの陷落必至を意味し、アツサム・ベンガル鐵道の遮斷により例のレド公路打通もいまや槿花一朝の夢に化さんとしてゐる。

一　公路建設の經緯

レド公路は一昨年十二月十五日米蔣合作で工事が開始され、本格的工事が開始されたのは昨年春以來で、新公路開鑿の責任者としてはスチルウエルが直接その衝に當り、アラスカ公路建設の殊勳者アロー・スミスを隊長とし、米工兵隊が黒人軍、インド人勞働者、支那苦力を驅使して工事を開始したものである。同公路は緬印國境パトカイ山脈の海拔三千米に近い高峻な山嶽を越え、ビルマ領に入つても上チンドウイン河に水源地帶たるフーコン地帶の濕地帶を貫き、更にそれよりビルマ縱貫鐵道の北方の終點ミチナの北方を經由して怒江方面の騰越に繋がり、騰越より舊ビルマ・ルートを利用して昆明に達せんとするものであるが、レド・騰越間を直線距離で結んだと

してでも三百七十キロ、而も途中には前述の地理的悪條件のほかにマラリア、山蛭等の悪疫や自然的障碍があり、一方ビルマ領に入れば厳たる皇軍の睨みが存在して、最初よりその實現の不可能なるは明らかであるが、それらの困難を押してまでも新公路開設工事を強行せねばならぬところに重慶側の戰爭物資窮迫の深刻さが窺はれ、一方米國にとつても現在印支航空路により戰前ビルマ・ルートによつて送り込んだと同量の物資（ビルマ・ルートの最大輸送量は月三萬五千トンと稱せられてゐた）を重慶に補給しつゝありと誇稱しつゝも、實情はその三分の一にも達し難い狀態にあり、地上通路の開通は在支米空軍の活躍を推進するためにも必要視されてゐたのである。

二　公路の實狀

次にレド公路を今少し詳細にして見るならば、同公路の出發點たるレドはアツサム―ベンガル鐵道の東端に近く、終點驛たるサディヤの五十キロ程手前にあるテインスキヤから分岐するレド支線の終點に當る。テインスキヤ一帶は、昭和十七年夏以來米國が附近に產する石油に着目、またカルカッタ・昆明間空中輸送路の重要中繼地として經營して來たもので、アツサム州に於ける米勢力の中心地を形成しすべく〇箇所の飛行場を建設し、營々として來たものである。レド・テインスキヤ間の支線はこれより先既に一九〇三年に完成してゐる。新公路はレドよりすぐに南下、緬印國境を形成するパトカイ山脈を縱斷するが、世界第一の多雨地帶たるこの地方の山林は文字通り千古斧鉞を入れなかつたものだけに、既に難工事の第一步は此處から始まつてゐると見られる。

る。海拔三千米に近いこの國境山林を越えると、公路はすぐ上チンドウイン河の水源地帶たるフーコン濕地帶に出るが、同地方はビルマとはいひながら緯度はわが臺灣と殆んど同じ位置にあり、加ふるに峨々たる山嶽に包まれたところだけに極端な冷氣を持ち、また上ビルマに於ける有數のマラリア猖獗地帶である。同地方の中心たるマインクワンは戰前英國の地方行政署所在地であり、人口二、三萬を算へる小部落で、多數のチン族が居住してゐるが、戰前英國がその治政に手を燒いた反英土侯が勢力を振つたところである。マインクワンよりミチナに至る間は往昔の北方民族の南下徑路であり、現在では立派な自動車道路が走つてゐる。

昨秋以來スチルウエル麾下の米將混成軍は頻にフーコンを中心に蠢動を開始、ミチナ方面のわが軍に對せんと出擊し來つたが、その都度擊退され、皇軍の嚴たる構へにそれ以遠のレド公路建設が到底不可能であることは敵も知悉してゐるところなのである。フーコン地帶よりイラワヂ河上流の山嶽地帶にかけては、原始民族の使用する間道が四通八達、これを利用して瞰越北方に迂廻する徑路も豫想せられないでもないが、名にし負ふ北部ビルマの山嶽地帶は古來未だ人類の通過したことのない大密林地帶であり、加ふるに海拔二、三千米の山嶽が聳立してゐることを考へるならば、これらを伐り拓くことは全く不能事に屬し、而も瞰越を中心とする怒江西岸は昨秋十月のわが先制作戰により重慶軍の活躍は完封され、今やこの方面に一人の重慶兵の姿も見出し得ない實情にあり、レド公路の問題も、畢竟重慶に對する米國の一種の掛引であることはこれを以てしても明らかである。

四　アツサム地方の歴史と文化

アツサムはアーサームと呼ぶのが正しいらしく、この地方の大半は山嶽に蔽はれ、西藏高原に源を發するブラマプトラ河が、その北部を東から西に横斷してベンガル灣に注いでゐる。この大河の流域を占める所謂ブラマプトラの河谷は、沼澤地帶の平野をなし、沿岸の米と斜面の茶の產出を以て有名であるが、アツサムの文化は主としてベンガルに近いこの河の流域に開かれたのであつて、その他の山嶽地方は未開の文化に後れた諸民族が住んでゐる。

アツサムの古い歷史は明らかでないが、古くからこの地方は北方から南下した蒙古系の種族が住んでゐたらしく、北部印度に大國が興り、文化の榮えた時代にもこの地方はその天險と酷熱多雨の惡風土のために殆んど文化に浴することなく、西歷四世紀頃から七世紀頃まではカーマルーパ國といふ國が榮えてゐたが、その後は數代の王朝が興亡し、八世紀から十一世紀の頃はベンガルのパーラ王朝及びセーナ王朝の勢力下に置かれてゐた。十三世紀の初にビルマのシヤン族に屬するアーホーム族が東部アツサムに侵略し、次第に勢力を擴張して先住民を征服し、その文化を開いたアツサムの名はこのアーホームから出たものであるといはれてゐる。然しアーホームも十九世紀の初にはアツサムに侵入したビルマ人に征せられ、次いでこの侵入者も亦英國人の征服するところとなつてしまつた。

アツサム語はベンガル語に近く、その文學は十五、六世紀に興つたものであるが、それらは多くベンガル文化の影響を受けた印度教の宗教、文學或はサンスクリット文學の飜譯である。アツサムには又古い時代からの歷史的文獻が殘つてゐるが、このことは歷史書の乏しい印度としては注目に値する。

アツサムの住民の間には文化の進んだ北部印度のアリアン族の血は混入しなかつたが、然しアリアン族の言語と印度教文化は夙くからこの地方にも傳へられ、印度教は土着民の原始的な宗教に少からぬ影響を與へた。現在日印同盟軍が戰つてゐるアツサムの東端マニプール地方の宗教も土着民の宗教と印度教の混淆したものである。

マニプールの話の序でにこの地方の住民の愛好するポニー（小馬）の話を紹介しよう。印度の土侯や英國の貴族、軍人等が好むポロ即ち打球競技は、元來ヒマラヤ山麓東西兩地方の住民の間で行はれた遊戲であるが、マニプールの住民は今は衰滅に瀕してゐるこの地方のポニー飼育と馬術に長じ、この遊戲はマニプール王國の國技といはれ、これが英國人によつて歐羅巴に傳へられて今日のごとく普及したものであるといはれてゐる。

現在アツサム地方には印度教徒が約五百萬、回教徒が約二百八十萬、原始的宗教を信仰する未開部族が約二百八十萬、キリスト教徒が約三十萬その他ビルマから移住した少數の佛教徒等がゐるが、これらの中印度教は最も普及し、特にヴイシユヌ神を崇拜するヴイシユヌ派と、女神を崇拜するヤクテイ派といふ奇怪な一派が勢力を有つてゐて、ブラマプトラ河流域のガラハーティといふ町に近いカーマーキヤ寺院は、カルカツタのカーリガート寺院と共に女神崇拜の中心として名高く、嘗ては血腥い人身御供等も行はれたのである。

アツサム文化史上記憶すべきは有名な唐代の入竺僧玄奘の訪問記である。當時この地方はカーマルーパ國と呼ばれ、住民は印度教を奉じてゐたが、玄奘は六百四十年頃國主の懇請によつて印度巡歴の足をこの地に向け、歡待を受けたといふ。彼の記すところによると、この國は周廻一萬餘里、現在のアツサムの面積は約五萬五千平方哩で、山川は嶮岨にして瘴癘の地であり、毒蛇、害草多く、國の東南には野象が群がり、この國に於ては象軍が特に盛んであるといひ、また珍果を多く産し、風俗は淳朴である。住民は短軀で色黑く、言語も中印度と異り、性質は粗暴であるが勤勉で向學の志を有し、天神を尊んで佛教を奉せず、多數の寺院を有する等と述べてゐる。十七世紀にアツサムに侵略を企てた回教徒の一將もこれと同じやうなことを述べてゐるが、一千餘年前の玄奘の記載は現在のアツサムとも相通ずるところが多く、文化の後れたこの地方は嶮岨な山嶽と濕潤の沼澤に滿ち、剩へ猛獸毒蛇の跳梁する地であつて、このやうな地にあつて戰闘する皇軍勇士の勞苦は察するに餘りあるものがある。

時報

（南支・南洋）

厦門

厦門市政府荒地利用奬勵を佈告

厦門市政府では戰時生産推進の趣旨に基いて此程更に同島荒地の墾積を奬勵し、民業の福利增進を圖ることゝなり、三月一日右に關し左の通り布告を發した。

佈告文

本市政府は戰時增産を强化する見地に依り本島所有荒地を開墾し甘藷を栽培せんとする者は其の團體たると個人たるとを問はず左記事項參照の上本市政府宛に願書を提出せらるべきである。

記

一　土地貸付申請方法

(一)　官有地並に業主不在の私有地に關するものは、民國二十九年八月二十九日市令第三十一號及び厦門島農地受